

中国の病院との交流

社会医療法人財団慈泉会（相澤病院）
常務理事本部長 塚本建三

相澤病院における中国の病院との交流について、書いて欲しいというお話を頂いたので、今まで当院が行ってきた状況について、掻い摘んでお話しさせていただきます。

以下、「である調」で失礼します。

北京と、天津のちょうど中間あたりに、廊坊市という人口400万人ほどの都市がある。この都市は、地理的にみて、北京、天津のベッドタウンにうってつけの場所にあり、広大な平野に位置していることもあって、近年発展著しい都市である。最近では、北京空港のサブ的な空港の新設が予定されており、更に伸張していくことが期待されている地域である。

中国との交流はかなり遡る。凡そ18年前の平成8年4月、私が入職した月の中旬だったと思うが、この都市から、医療交流団と銘打った視察団が松本市に来訪した。松本市と、この廊坊市とは、姉妹提携を結んでおり、友好交流の一環として来松したものだが、その時来訪した視察団の団長が、高玉廊坊市衛生局長、副団長が、廊坊市人民医院（病院：600床）の董天朗院長であった。

この視察団は、信州大学とA病院、それに当院を視察して帰国したが、程なく、廊坊市人民医院建院50周年の記念式典への招待状が、相澤理事長と、広報を担当していたS女史宛に届いた。

S女史はこの視察団取材を通ずる中で、痛く董天朗院長に気に入られ、理事長に随行して来て欲しいということであった。招待状の内容は、6月に中国廊坊市において、記念式典を挙げるので、ご参列頂きたいというものであった。

理事長は、外せない先約が入っていて行かれないので、私が理事長の名代として、S女史を伴って松本日中友好協会の西田節夫理事長、大槻瀬平副理事長とともに訪中し、式典に参列した。

中国の式典は、ド派手という言葉がぴったりするような華やかなものであった。

この式典から10年経った平成18年にも、建院60周年式典が行われ、やはり、相澤理事長の都合がつかないということで、私が名代で出席した。この時は、理事長の奥様に同行してもらい花を添えて頂いた。廊坊市人民医院には、いろいろなスローガンを書いた垂れ幕が建物を包むように飾られ、さながら満艦飾の軍艦を見るようであった。

遡るが、平成8年の秋には、相澤理事長も廊坊市を訪問し、人民政府、人民医院と交流を行った。

これに先立ち、日本で電波法の関係で使用が出来なくなった医療機器12台を人民医院に寄贈することになり、電圧を200Vに改装、消耗品も1年分を付け、技術員も派遣して寄贈した。この際、チンコム（対中国輸出統制委員会）規制のチェックが入り苦労したが、問題なく実行され大変感謝された。

このこともあって、相澤は廊坊市訪問の際、廊坊市人民医院より名誉院長に聘されている。

これらの訪中により中国廊坊市政府市長の王愛民氏や、外事弁公室楊勝国主任、蘇秉武副主任

など要人とも親しくなり、現在は交流の実績を評価され、廊坊市の名誉市民にも叙せられている。

医療分野での交流は、廊坊市人民医院の医師や、看護師の6ヶ月研修受け入れが、4回ほど行われたが、日本の医師免許や看護師免許が無いので、診察やオペなど資格を必要とする医療行為ができないことから、いっそ、日本の免許を取って本格的な研修を行う方が良いのではないかと、そのためには、中国廊坊市の高校課程を卒業した者の中から、希望者を選定し、来日後に日本語学校を経て、医科大学または、看護師養成校で免許を取ってから、相澤病院で数年間勤務し、その実績を持って廊坊市へ戻って、中国の医療水準向上に資することにしようということになった。

しかしいざ始めてみると、日本の医師免許水準が高すぎるため、来日希望者の水準では医師を希望しても合格できず、看護師だけでこの交流を続けることに切り替えた。

この協定に基づき、来日した看護師希望者は、途中で挫折したものを入れると37名にのぼり、既に、日本の看護師免許を取得した者が18名、そのうち現在も当院に勤務している看護師は、10名（H26年1月現在）に達している。

日本語学校、看護学校と日本の学校で日本語を使う機会が多いので、通常の会話では日本人と遜色ない水準に達している。患者さんの評判も、総体的に日本人看護師と比べても良い方である。中には日本人より日本人的で、愛想も良く、すこぶる評判のいい人も複数いて嬉しい限りである。

このプロジェクトをやってみて確信したことがある。それは、人柄は勿論大切な要素だが、やはり「学力水準は高くなくてはだめだ」ということである。日本語能力も、2級レベルは来日時に必須で、来日後1年間は、日本語学校へやっているが、基礎的な日本語能力不足は、その後の展開に大きな影響を与えることになる。

来日してからの毎日は、日本語能力の伸長に充てなければならないので、その意味でも学力レベルは、総合で少なくとも7割は、点がとれる水準の者を、選定すべきだと考えている。

上記のプロジェクトは、あくまでも日中友好の一環として、純粹に人的交流と、中国の医療水準向上を目的にしたものであったが、結果的には看護師不足を緩和する大きな力になった。

しかし、今日のように7:1看護が導入され、看護師不足にさらに拍車がかかる状況の中では、中国やその他の外国から、看護師を採用することも選択肢に入れざるを得ない。

26年度の診療報酬改定で、看護師の需要がどうなるのか、皆目見当が付かないが、若年者の減少は明確な事実であるので、看護師不足は今後も簡単に解消されるとは思えない。

したがって、看護師志望の外国、特に中国や韓国の若者を日本に連れてくることは、看護師不足対策に寄与するものと確信する。

私は現在、松本城ロータリークラブに所属しているが、このクラブの米山奨学生だった中国天津市の、天津医科大学腫瘍病院乳房科女性医師、傅麗さんのご縁で、天津医科大学腫瘍病院との交流も始まり、相澤理事長や、宮田院長補佐、倉田治全財務部長も訪問し、平成19年の当院病院祭には、郝希山院長先生も来ていただいて、平成20年には友好病院協定を締結、相互交流が活発化してきている。

平成20年9月には、宮田院長補佐等が友好病院会議と講演のため、またがん集学医療センター一副センター長、唐木芳昭が乳腺腫瘍学会へ出席と講演のため訪中した。

天津市の泰達開発区に、劉曉程院長率いる泰達国際心血管病医院がある。平たくいえば 心臓病センターである。それも中国有数の心臓病センターで、JCI病院でもある。東京医科歯科大学の川淵教授のところ、研修に来ていたこの病院の俞剛先生が、川淵先生と理事長のご縁で、

当院を訪問されたのをきっかけに、その後、劉先生が東京に来られたので、私に出て来れないか、という電話が兪剛先生から入り、それに応えて上京して、劉先生に面会したことからお付き合いが始まり、私や理事長が訪中したり、劉先生も何度か来日されたりする相互訪問と、泰達の部長クラス看護師の6ヶ月研修が始まり、その後、病棟婦長クラスの看護師が、当院のサービスを学習するため、1回3名ほどで、1ヶ月研修を受けに来たりして、現在までに泰達国際心血管病医院の婦長クラス全員20数名の研修が終了している。

河北医科大学第三病院（骨科＝整形外科）院長の張英澤先生とも、6年前まで当慈泉会法人事務局に勤務していた王鉄峰君のご縁で、私が先方を訪問したことから、付き合いが始まり、張英澤院長先生も当院を訪問されている。この張先生は、昔、信州大学へ留学した経験があり、当院でも1年間整形外科医として勤務した経験を持つ方で、相澤病院には大変お世話になったので、訪中した我々には、大歓迎をすることになっている。張先生は「鶴の恩返しだ」とのたまう。大変、明るい前向きな方でこの人が院長になってから、第三病院は飛躍的に業績を伸ばしたと聞いている。

中医関係では、相澤理事長が上海の中医医院を訪問している。

北京市の天安門から東へ30キロのところに、廊坊市の飛び地で燕郊という場所があるが、そこに燕達国際医療健康城という病院が2,000床、介護施設8,000床という超巨大医療施設があるが、東京でのPR会場を手配したり、日本の同種の病院の見学などのお手伝いをした経緯がある。

この施設を経営する燕達企業集団は、李懷董事長率いる建設・不動産を中心とした企業集団だが、燕郊に多数の不動産物件を所有しており、折からの不動産ブームの波に乗って規模を拡大して巨額の利益を上げている。

この勢いを駆って、医療分野に進出を計画し、国際レベルの開発を実行中である。あまりに巨大な計画なので、私のような凡人には予測はつかないが、是非成功してほしいものだと思っている。

この他、外国の医師研修の受入れ、特に、中国からの医師研修受け入れは、2007年から始まり、現在までに、脳外科医師4名、内視鏡医師1名、合計5人に達している。

この他、先述の泰達国際心血管病医院が、隣地に建設予定のビルに、リハビリ病院を作りたいので協力して欲しいという話もある。

リハビリ関係では経済産業省が、中国に於ける医療の状況につき、今後のビジネス展開が可能か、調査事業の募集を行っているが、当院もこれに応募、採用されたので、調査をかねて、北京の脳外科病院へ、最新のリハビリを指導に訪問している。

いずれにしても当慈泉会と中国の医療関係の交流は年を追って拡大してきている。これらの実績を評価され、相澤は現在、松本日中友好協会会長の要職にある。

相澤理事長が、松本日中友好協会の会長に選出されてから、友好活動は新たな展開を見せている。従来の日中友好活動は、ややもすると、先の大戦を引きずる形で行われることが多かったように思われるが、中国が経済的にも大国の仲間入りを果たし、世界に大きな影響を与える存在になった今日、平等互惠の精神のもとに、将来に向けた日中友好活動を推進する団体になっていくべきだという、相澤会長の方針が打ち出され、松本日中友好協会西田節夫理事長の強力な中国人脈と

相俟って、中国対外友好協会や在日中国大使館などとの、強い絆づくりが着々と成果を上げてきている。

昨年2013年には、中国特命全権大使である程永華ご夫妻が、松本日中友好協会総会に来松され、その際、当院を訪問、当院の中国人看護師や、予備軍、慈泉会の中枢である本部職員など19名の中国職員と面談を行って行かれた。画期的な出来事であった。

この様に、社会医療法人財団慈泉会相澤病院と中国との交流は、多岐に亘り、18年の長きにわたり発展してきている。

国家間では難しい問題が山積しているが、この様なときであるからこそ、民間による一層の草の根活動が要請されていると考える。

今後も、着実に交流を積み重ねていきたい。